

## 【Notes and Communications】

### 第7回経済学史学会研究奨励賞受賞作講評

#### 中井大介『功利主義と経済学——シジウィックの実践哲学の射程』

晃洋書房, 2009年

第7回経済学史学会研究奨励賞の公募（締切2009年10月31日）に応じて推薦された作品は著書1点であり、前年度『経済学史研究』（第50巻2号、51巻1号）で書評対象となり、応募条件を充たした単著が2点あり、計3点を審査の対象とし、審査委員会で慎重に審査した結果、上記著作を第7回の研究奨励賞の受賞作と決定した。

本書は、哲学者・古典的功利主義者シジウィックの経済思想を通じて、倫理学・経済学・政治学を軸にした彼の哲学体系、功利主義思想、さらにミルを越えようとして提示された文明社会のヴィジョンを明らかにすることを目的としている。そのために本書は、シジウィック研究者がこれまで本格的に取りあげなかった三冊の著書をはじめとした諸論文、草稿類を分析・考証している。

本書は、ヴィクトリア時代に生きたシジウィックの生涯を、知性史を軸に草稿である *Papers of Henry Sidgwick*（この草稿は、本書を通じて随時利用されている）などを使いながら、彼がどのようにして哲学体系を構築したかを明らかにする第一章に続いて、『倫理学の諸方法』（1874）を扱う第二章、『経済学原理』（1883）を扱う第三章、『政治学要論』（1891）を扱う第四・五章、そしてシジウィックの現代的意義を論じる第六章から構成されている。

『倫理学の諸方法』でシジウィックは3つの実践理性を中立的な立場から分析し、個人の道徳原理を、直観主義を内包する利己主義と功利主義とに分け、ベンサム

の「幸福の最大化」59）とミルの功利主義（「社会全体の幸福の最大化」60）とを「折衷」（63）し、「利己心と利他心の統合は不可能であると見切って」（54）、「実践理性の二元性」を主張した。

この「実践理性の二元性」と「サイエンスとアート」との区別とに「結節点」を求めた筆者は、『経済学原理』では利己的と仮定された「経済人」に基礎を置くサイエンスと利己的であり功利的でもある「普通の人間」に基礎を置くアートとが生産論、分配・交換論で論じられていると指摘し、「経済人」の経済活動の帰結が「普通の人間」の構成する社会にとって望ましくない帰結がもたらされる場合に、政府の介入を求めている（89,92）。その上でシジウィックは「功利主義の下に」「『正統派経済学』と社会主義的立法の対立を調和させ」（100）ようとし、さらにその本格的な展開が『政治学要論』で行われている。

経済学以上に評価されなかった『政治学要論』の「政府介入論」を筆者は「功利主義を社会の道徳原理として明確に位置付けることで、個人主義と社会主義の対立を解消しようと試みるなど、むしろ意欲的で興味深い著作」（112）と位置づける。なぜなら本書もまた、政府の究極的目的を「社会全体の幸福の最大化」に求め、その実現のために「富の平等な分配によって社会全体の幸福を促進する社会主義的政策」は正当化されるし、「各人の利己的な幸福追求によって社会全体の幸福を促進する個人主義的政策」も正当化されるとして、シジウィックはここでもベンサムとミルとの「折衷」をはかっている

という(121-22)、『政治学要論』の「政治体制論」でも、民主制へと傾きつつある現状への危機感を反映して、「貴族制」と「民主制」とのバランスこそがもっとも望ましい政治体制であり、それもまた功利主義原理によって正当化されるとして、「民主制を牽制しながら貴族制を擁護しつつも、代議制における一般民衆への教育効果を重視し、究極的には個人の自由の発現や人間性の発展を求めるミル」とは異なり、シジウィックは「柔軟性を持たせた功利主義で一貫性を保持した」(183-84)という。

最後に、『哲学の領域と諸関係』(1902)でのシジウィックは経済学を包括的な学問領域である政治学の一部と位置づけるものの、それが分析的・理論的に洗練されたサイエンスであるため「唯一信頼に足る学問領域として区別して展開可能である」と捉えたという(193)。その倫理学・経済学・政治学を含む彼の哲学体系(彼はモラル・サイエンスと呼ぶのだが)は、「非常に弾力的に解釈されうる功利主義を究極目的として、あらゆる実践研究を統制する実践哲学」なのである(194)。まさにこのシジウィックの思考に筆者は功利主義の現代的意義を認める。

このように本書は、これまで「消極的主張」(52)と理解されてきた「実践理性の二元性」に「積極的意義」(i)を認め、それをシジウィッ

クの哲学体系に共通する哲学であると位置づけ、その全体像を明らかにしたきわめて優れた著作であり、今後のシジウィック研究の出発点となる著作である。

とはいえ、本書に課題がないわけではない。第一に、シジウィックによる哲学体系構築の過程を筆者は彼の主要著作の改訂作業の「すり合わせ」に求めているが、その具体的な改訂内容を今後さらに明示すれば、筆者の結論はより説得的となるであろう。第二に、「シジウィックの理解が正しいとすれば」(59)と筆者が断るように、本書の結論はあくまでも彼のベンサム・ミル理解に基づいている。もちろん彼の哲学体系を明らかにするという本書の目的からすれば、この前提は有効であったが、彼の哲学体系を倫理・経済・政治思想史に位置づけようとすると、最新のベンサム・ミル研究を踏まえてもなお、筆者の結論が如何なる意味で有効であるかを検証する必要がある。第三に、本書に索引や本書とその基礎となった筆者の従来の研究との関連を示す説明があれば、読者にとって有益であったと思われる。

2010年5月21日

経済学史学会  
学会賞審査委員会